

『無者キリスト』を読む④ 第三部 無的実存

『無者キリスト』 第三部 まえがき、第一章「無者=無的実存者」

2001年7月15日（東京 新宿）

●無的実存 まえがき

今回は『無者キリスト』の第三部「無的実存」に入ることになります。頁でいいますと281頁（新280頁）から第三部が始まります。「まえがき」というのが283頁（新281頁）からでありまして、286頁（新284頁）の所に第一章「無者=無的実存者」という第一論文が始まることとなります。ここからはやや神学的な角度から書かれていますので、所々また難しい所がありますけれども、先生のは「神学」と言うよりも「告白」であるという点では一貫していますので、そういう角度から見たいと思います。それから、アブラハムのお話が出てきたり、イザヤ書が出てきたりしますので、その時にはそちらを開くことにします。それでは、「まえがき」の所から始めていきたいと思います。

《無的実存 まえがき

無において私の意味するところは、虚無とか空無ではなく、実存的な無私、私心の無いことを根底とした実存的な無である。

前に『聖意体现』（キリスト告白録第3巻）の「主の祈り」というのを取り上げました時にも申し上げたけれども、「実存的」ということは、私たちにはなじみが薄い。戦後、非常に哲学でもはやされた言葉であったけれども、今の私たちにとってはやや遠い言葉のように思います。今の時代に即して言うならば、「生きざま」とか「生き方」という、「あの人の生きざまはどうだ」とか言いますね、そういった生活実体をともなったその人の「在り方」というふうを考えていただいたいと思います。要するに、

「いかに生きべきか、その人はどういうふうに生きていこうとしているか」という時に、この「無」というのは、いわゆる客観的に「何も無い」という「ナッシング」というのではなくて、その人の在り方が神さまの前に自分を投げ出した空^{から}っぽの在り方——「これだ」という私心がない、「わたしごころ」がない——そういうことを根底にしている在り方としての「無」だというお話なんです

孔子が論語の中で

「意なく、必なく、固なく、我なし」

といった我執のない心境に通ずるものである。

つまり我意がない、作為がないという、自然のままになさっていて、それが本当に法則に



かなっているという意でしょうね、この孔子の論語の言葉は。

イエスの全生涯は

「わが意志に非ず、汝の意志が成らんことを」

という神意一切を以て貴かれていたが、そういう実存相がこの無である。

これはもう何遍も先生が言っておられるので、もう繰り返す必要がないようなことです。

おのれを神の前に投げ身し、投入し、信入して、聖意を体現してゆく態勢であるから、

この無はすなわち無限無量の内実をもっている。》

ここにはちよつと言葉を補わないといけませんね。「おのれを神の前に投げ身」していったら、なぜその無が無限無量になるか？ イエスさまの場合には、もう自分をすっぱり神の中に放り込まれたら、そこで空っぽになっているイエスさまの中に、神さまが100%現れてきた。だから、「己の身を神に投ずる」ということと、この「無は無限無量」、「即神さま」という、

「我を見し者は神を見しなり。わがうちに父、働き給う、在し給う」

という、これがピッタリ一つであつたんですね。けれども、我々はいくら

「キリストの中へ飛び込め、信入しろ！」

と言われても、ではそれをやれば直ぐ無限無量になるかというのと、そうはいきません。必ずそこに先ず、飛び込むにしても十字架という、十字架のまさまに飛び込む。十字架のまさまが私たちを無限無量にしてくださるという、「即無限無量」なんてなれませんけれども、まさまが十字架でもって、

「あなたはもう無者なんだ、私が無者にしてあげたのだよ」

と言つてくださっている。

「だから、私を受けとつておれば、それは即無、そして即無限無量なんだ」

と。その「即」の所には十字架が立っていますから、これが非常に大事なことです。

小池先生の語つてくださった福音で、私は二つの特徴的なことがあると思う。

先ず一つは何かというのと、これは普通のクリスチャンの方には躓きになると思いますよ。というのは、先生は「神」と言われななんです。祈る時でも、

『神さま！』と祈るのではなく、『イエスさま！』と祈りなさい

と言う。普通の教会では、「父なる神よ！」と祈つて、そして最後に「イエス・キリストの聖名により」と言う。最後の所でやつと、

「救い主イエス・キリストの聖名によつてお祈りします」

と、くるんですけれども。我々の意識として、「神よ」と祈る時は、茫漠たる神さまでわからないですよ。ところが小池先生は、

『「まさまー！」と、目の前にまさまがいらつしやる、その方に祈る。その背後にイ

エスさまを包んでいらつしやる神さまがいらつしやるから、『イエスさま、まさま

ま！』と祈つたことは即ち神さまに祈っているんだよ」



と、これをハッキリ言ってくれました。そんな「聖名により祈り奉る^{たてまつ}」という終りの付け足しではなくて、もともとから「イエスさま！」と祈れと仰った。これは教会の人たちにとっては躓きでしょうね。

『主の祈り』を見てごらんください。『天にまします我らの父よと祈れ』と書いてあるではないか」

と。ところが、先生は文字に囚われない。自分にとつては、イエス・キリストという方を抜きにした神さまなんて考えられない。いや、考えられないどころか、その方〔神さま〕にそもそも祈れない。私たちはやっぱり祈ります時にハッキリしたお方に祈りたいですよ。お話しする時だってハッキリしたお方にお話したい。どこにいるかわからない方向に向かって呼びかけるよりも、やっぱりハッキリしたお方に呼びかけたい。

それは、「隠れています神」がイエス・キリストというお方において全的に現れた。しかも、その「現れた神さま」「イエス・キリスト」は私たちを救ってくださる神さまで、私たちのマイナスを全部引き受けた、全くありがたいお方なんです。だから、「主さま」と言いつて、先生は祈られる。

私も始めの頃は、

「あれ？ 違うのではないかな？」

と思ったんですよ、「父よと祈れ」と書いてあるのに。

「私は『主さま！』と呼ぶんだよ

と言うから、

「小池流というのは勝手なのかな？」

と思った。でも、正にそうなんです。これはいわゆる実存的に、我々の生きざまとして、「主さま！」と祈って初めて平安がくるのであって、

「天にまします我らの神よ」

とかいって、なんだかパーッと分散されていくような、そういう祈りは力がこない。

「主さまー」、「はいー」

「マリアよ！」、「ラボニ！」

と。そういう、打てば響く人格関係。抱^{いだ}き抱かれる関係です。それを「主さま！」と言いつて、小池先生は告白しておられる。だから、もう理屈ではないんですね、現実なんです、「主さま！」と呼ぶのは。我々が「お母ちゃん！」と呼んだり、「誰々君！」と呼んだり、具体的に名を呼びますね。エホバの神さまは、

「みだりに我が名を唱えるな」

と言われたくらい畏^{おそ}れおおいお方なんです。畏れおおいお方であつて、しかも、人間の側から捉えどころがない。向こうの神さまの側からは、我々のことをわかつていらつしやるでしょうけれども、我々の側から「神よ！」なんて呼びかけるなんて、まことに畏れお



いし、非常に観念化してしまう。

イエス・キリストだったなら、目の前にいてくださるんです。

「我々が目で見たもの、つらつらと手で触ったもの、つらつらと眺めたもの、
生命の言葉である我々の主イエス・キリスト」

というお方を目の前に差し出してくださって、「その方にすがれ」というのがパウロさんの告白でもあります。ヨハネでもそうです。ヨハネだって、

「キリストのそばでいつも胸に寄り添っていた」

と書いてあります。愛する弟子だった。ところが、愛する弟子で寄り添っていてもまだ捉えきれなかったものが、聖霊が臨んできて初めて内なる主さまが、外で見ていた主さまでなくて、本当に霊の目でつかまえる主さまがそこに現れた。だから、それは消えないわけですね、いつまでも消えない。そういう方としての主イエス・キリストです。

「わが主イエス・キリスト、これを抜きにしては神さまなんてない」

というのがまず第一の特徴です。

それから、第二番目に小池先生の特徴は、この無、無私、「無者」ということ。

まるで虚無の無のように誤解されるけれども、そうじゃない。

「この無というのは、本当に己を投げ出して、己を空っぽにしているところに、神さまの方から臨んできてくださる無限無量——内容的には我々にとっては生命——
—なんだよ」

という、この「無者キリスト」を告白してくださった。私はこの二つが先生の福音の特徴だと、実は思っている。そういう角度からこれをまた味わっていかうと思います。

《おのれを神の前に投げ身し、投入し、信入して、聖意を体現してゆく態勢》

非常に投げ出していく態勢ですね。静かに坐りこんでいるのではなくて、行動的、動的なんです。そういう態勢です。

であるから、この無はすなわち無限無量の内実をもっている。このような実存を無的実存と呼ぶ。無的実存を100%に体現したのがイエスで、そのようなイエスを無者と私は呼び奉る。無者はすなわち無限無量者である。

我々は自らこの無私は無には至り得ない。我執の罪びとだからである。それゆえ無的実存の可能根拠はキリストの十字架の贖罪にある。》

「無的実存の可能根拠」と書いています。それは「十字架の贖罪にある」という。この「可能根拠」と書いてあるのがとても面白いと思うんですよ。「十字架の贖罪」というのを命題として受けとって絶対だめです。それを本当に自分たちのものに、身に体したときに無的実存が実現する。

「もう十字架で全人類の罪は赦されている。だから、全人類は救われている。はい、めでたし、めでたし」



だったら何も変わらない。そうじゃなくて、それが自分の中に根付くこと。根付いて本当にイエスさまと一つにされる。その時にこの事態が展開するという非常に動的、創造的なんです、新創造の事態なんです。

「元始に神、天地を創造り給えり」

というのも創造でした。アダムとイブを創られたというのも創造でした。

「この十字架の贖罪を通して新しいあなたを創りだしていくぞ」

という御意の展開、そこへ自分の身を委ねていく。委ねていったときに、そこであなた方一人ひとりの中に神さまの成してくださる新創造が始まるわけです。

主体は神さまの側です。主体は神さまの側ですけれども、こつちが「はい！」と言って動的に応えていかないと始まらない。だから、「信即行」と先生はよく仰います。

「信ずるといふことは身を投げだしていくことだ」

と。そうした時に初めて神さまの創造が実るのであって、こちらが「はい」という応えを出さないと、神さまが一方的に思われても、どうにもならん。だから、「レスポンス」(response)、「応答」とかいう言葉が使われる。神さまの呼びかけです。神さまが呼びかけ、救いを差し出してくださっている。それに対して全存在で、

「はい、いただきます。それに委ねます！」

と、躍り込んでいくという、その心の姿勢です。そして、それが実生活でも具体的に表われてくる。

「私はもうこの主さまの十字架の赦しをいただきましたから、もはやいつまでも自分の罪にはこだわりません。私はダメなやつですけれども、主さまの十字架の贖いのゆえに私は義人です」

と、そうやってハッキリと誰に対しても告白していくという姿勢が大事なんです。私にとつてはイエス・キリストというお方が一番大事なお方です。その他諸々とは比較できない。よく、「これとあれとはどつちが大事か？」と訊かれる。たとえば戦争中に、

「天皇陛下とイエス・キリストとどつちが大事か？」

「イエス・キリストです」

と言ったら、牢屋に放り込まれるということがあった。次元がちがうんです。イエス・キリストという方は超越的なお方で、比較できるものではない。地上に現れたいかなる者、現存の者、過去の者、すべて比べ得るものはない。だから、質問そのものが成り立たない。言葉は両方とも「神」と言われていても、全然、存在次元がちがう。そういうことだと思えます。

ですから、この本の「福音的饗宴」という項にありますように、天国の饗宴に招かれた人がいろんな地上の大事なものを持つているものだから、それを理由に断り始めたという。

「田畑を見に行かなくてはなりません。家畜を見に行かなくてはなりません。今度、



結婚しましたので、そっちの準備で追われています」

とか言つて、神さまの招きをみんなそれぞれの理由があつて断つた。それは地上においてはそれぞれ大事なことですけれども、神さまが呼びびになつていられる時に、そのようなものに心惹かれていられるということでは、命懸けとはいえない。小池先生はよく「命懸け」と言われた。その「命懸け」とは、「他のものは顧みない」ということなんです。他のことを顧みず、先ず大事なものに全力でぶつかると。そして、その顧みなかつたものを、神さまの側で、キリストの側で顧みて、ちゃんといいようにしてください。それを、イエスさまのことはちよつと二番目にして、

「私はこのことを先ず片付ける、次はこれを片付ける、次にこれをやる。やつと片づいたと思つたら、また次が出てきました」

「ではいつたい、いつイエスさまのところに行くんですか？」

と、こうなりますよね。本当にそうなんです。だから、何があつても、先ず主イエス・キリストさまを優先する。これが、

「先ず神の国と神の義を求めよ」

ということなんです。「まず神の国と神の義を」と、本当に大事なものを大事にしたときに、そうでない他の諸々のことの、ちゃんと整いができてくるんです。整いができてから、「主さま！」と言おうとしたら、これは永遠に無理です。自分だつて同じですよ。

「自分が本当に立派な人間になったら、今度は胸を張ってイエスさまのところに行きましよう」

なんて、そんな立派な人間になんか成れつこありませんよ、それは無理ですから(笑)。それを先生が、

「私は死に至るまで罪びとだ」

と言われた。そういうことですので、違うものを同じ平面で考えると混乱いたしますので、もう違うということをお考えになつてください。それが今のところですね。

《我々は自らこの無私の無には至り得ない。我執の罪びとだからである。それゆえ無的実存の可能根拠はキリストの十字架の贖罪にある。この罪の贖いによって無私の根源現実を賜^{たま}わ^るからである。》

賜^{たま}わ^るんです。自分が獲得するのではなくて、賜^{たま}わ^るんですね。

そこに聖霊が臨むことによつて無即無限無量の質が現実となる。》

先生の特徴の三つ目、それは「聖霊」ということです。先生の福音の、十字架による圧倒的な救い、それが即「我々が生命である」ということを「然^{しか}り、アーメン！」と言わしめるものは何かといったら——自分の信仰ではないんですよ——それは聖霊なんです。聖霊が我々に「そうだよ」と言わしてください。」「そうだよ」と示してください。」「

私は、「自分でそれに応答する」ということを言いました。その応答したものに對して、



「それで間違いないよ、大丈夫だよ」
と、絶えず言わしめ安心せしめてくださるお方は聖霊なんです。これが最高の賜物、最高の贈り物です。

「十字架、その贖罪の根源現実」

とありました。これはイエスさましかできなかったことです。我々にこれを下さった。しかしながら、これは聖霊につながり、聖霊がこれを示すという関係にある。だから、聖霊によらざれば、誰も「イエスは主である」と告白できませんし、聖霊がいてくだされば、この小池先生が書いておられることを、「然り、然り、アーメン、アーメン」と言わしめてくれるんです。

● 祈らされる

だから結局、「祈り」といっても、聖霊が我々の祈りを助けてくださらなければ、人間の努力でそんな祈れるものではない。それは私の実感ですよ、皆さんは知りませんよ。私はそんな殊勝な人間ではないものですから、そんな自分の力で祈れない。祈り心は出てきます。祈り心は大事にする。祈り心が湧いた時に、それをチャンスとして祈り続けると、聖霊が助けて甘美な世界へ導いてくださるのであって、自分で作りだすものではない。

ある程度、自分で環境を整えるのは必要です。テレビやラジオがやかましかったら、祈れませんもの。ざわついている所では祈れません。やっぱり静かな環境を自分で整えて、場合によつたら家族とも切断して、ひと部屋に自分は籠もつてという、そういう静かな環境をつくるのが大事です。そして手を合わせます。

次々と仕事が迫っている時はなかなか落着いて祈れませんよね。だから、せめて1時間なら1時間、あまり雑事にとらわれたいですむという時間を見出されたら、その時に手を合わせてまざままに向かわれたらいい。

「今日は15分だけ、あとすぐもう仕事があるから」

なんていう時はなかなか落着いて祈れない(笑)。でも、15分だって尊いですよ、5分だって尊い。とにかく、心をまざままに集中できるといふ、その環境と時間を自分でつくるということが大事です。私は具体的なことを言っているんで、理論的なことではない。実際的なことを言っているんです。

そういう意味では、この日曜日というのはありがたい。私だって日曜日は出勤しないでいいから、その朝のほんの少しの時間だって、祈り心地になります。そうするとやっぱり、日曜日の時間というのは非常に、朝の時間もありがたいですね。早く出てこちらへおいでになる方だったら、電車の中で祈り心をつくられたらいい。日曜日の朝というのは出勤がないから、電車は割合にすいているのではないでしょうか。そういう所で祈りの時間をつくられたらいい。やはり日曜日というものがあるということは、非常にありがたいことで



すね。ダラダラダラダラ、日常生活が続いていくようだったら、その中で「祈れよ」と言いましても、なかなか難しい。しかし、日曜日がある。これが一つの節目になる。それからまた日曜日に向かつての日々があります。そういうことで、メリハリをつけるということが日常生活の中でも大事なことです。生活を転換するということですかね。

私の生活だったら、これは祈りではありませんけれども、裁判所での生活は籠もりっきりの生活ですから、朝の早い時間に外へ出る「早朝ランニングのこと」。そして森の中に入って行く。代々木公園のあの森林の中へ入って行きますと本当に、「ああ、やっぱり自然は素晴らしい」ということを実感します。これは実感なのであって、理屈ではない。実感するんです。最近はずっと暑いですから、毎日に行けなくなってしまいましたけれども、それでも努めて行くようにしている。そうしましたら、その朝の爽やかな時間と環境、それから昼間の自分の仕事。それが終わってからの宿舎での生活。この三つを区切ってやれますから、これもよし、朝も昼も夜も仕事仕事だったら、私はもう潰れてしまいますね。寝ていてもうなされますもの、本当に。だから、その切り換えが大事なんです。切り換えもできないほど忙しい方は本当に気をつけられないと、病気になって倒れてしまいますよ。熱心かも知れないけれども、仕事に忠実なのかも知れないけれども、自分自身がつぶれてしまったら、何にもならないですよ。ですから、スローのように見えていても、やっぱりそこはある程度、我慢をして、断ち切って気分を変える。その中にまた祈りというものが入ってくれば、もっと素晴らしいと思いますけれども。そういうことを皆さんで工夫なさったらいと思う。

●そこに聖霊が臨む

「そこに聖霊が臨む」

という、それで今、申し上げたんですが。

《そこに聖霊が臨むことによつて無即無限無量の質が現実となる。このような無は太陽の白光の如きもので、白光が一切の光彩をふくむ根源相である如く、無は無限定無量なるがゆえに一切の徳相の根源相である。》

「徳相」という語は、先生はここでしか使っておられないと思う。「徳目」という言い方はよく出てきますけれども、「徳相の根源相である」という。いろんな徳の相があるけれども、その一番根源にあるものがこの「無」、しかもそれは聖霊が宿り給う無であるという。

この無はそれゆえ有の相対概念としての無ではない。有に対して無という、これは同じ平面なんです。「有る、無し」という、「有るか、無いか」という次元を超えた絶対次元、それを先生は限定できないから「無」と言われただけで、「無」という言葉すらも躓きなんです。有とか無とかいうのは相対的なもの、私たちは感覚的に「有る、無い」とわかる。けれども、それを突き抜けたところの次元というのは、「無」という



言葉さえも私は不適當だと思えます。でも、何かで表さないとしようがないから、先生は「無」というふう^にに仰つたんでしよう。「絶対次元」と言つたらいいでしょう。

対極を絶した絶対極である。

先生はよく、「一極絶対」という言葉を使われました。我々は「二極相對」の所で生きています。有・無、罪・義、善・悪とか、大体二つの所で生きていなければならないけれども、神さまの世界は一極絶対なんです。対極がない。もう究極なんです。比べるものがない。そういう所の世界、次元。ですから、

「神は愛なり」

というよりも

「神は無なり」

という方が本当は深い。

というのは、「神は愛なり」というのは、「愛」という言葉で限定してしまっている。そんな言葉で限定できるようなお方ではないから、「神は無なり」という言い方をされる。

何となれば、神は一切の概念的表現で限定しきれるものではないからである。「神は無なり」とは、神は無限定者なり、ということである。パウロが、

「ああ神の智慧と知識との富は深いかな、その審判は測り難く、その途は尋ね

難し」（ロマ11・33）

といっているように、不可測の神である。神は本来「隠れて在ます神」（イザヤ45・15）である。》

イザヤ書45章を引かれています。45章の14節、

「14 エホバ如此^{かく}いたもう エジプトがはたらきて得しものと エテオピアがあきないで得しものとはなんじの有^{もの}とならん また身のたけ高きセバ人きたりくだりて汝にしたがい 繩につながれて降りなんじのまえに伏しなんじに祈りていわんまことに神はなんじの中にいますこのほかに神なし一人もなしと不思議な光景なんです。相対的には非常に力強いエジプト人とかエチオピア人とか、あるいはセバ人、そういう人たちがイスラエルのもとに平伏して、「あなたという民族の中に、あなた方の中には神さまがいらつしやる」と、そういうふう^にに告白するということ。

15 救をほどこし給うイスラエルの神よ まことに汝はかくれています神なり」

（イザヤ45・14〜15）

この「隠れたる神」がイエス・キリストにおいて具体性をもって現れてきたんですね。いわゆるモーセの十誡、十言の一番初めにも、

「いかなる像^{かたち}をも造つてはならない」

とある。神さまというのは無相の方、相^{すがた}なきお方。

「決してそれを形あるものに刻んではならない」



と、そういうことを仰った。人間というものは形あるものに縋^{すが}りたいんですね。何か形あるものに縋^{すが}って——本当はその形あるものを通して形なきものに縋^{すが}るつもりなのに——いつのまにかその形あるものが全てになっちゃってしまっただけで、背後にあるものが消えてしまう。だから、偶像は危険なわけです。イエス・キリストという方は正に形ある神そのものなんです。でも、その形というのは、見えるイエスさまではなくて、その見えるイエスさまの中に潜んでいるイエスさまの本質なんです。

見えるイエスさまだけだったら、弟子たちは三年ほど一緒にずっと見てきたけれども、

「三年一緒にいて、あなた方は少しも私のことをわかっていない」

と、イエスは仰いました。

「我を見し者は父を見しなり」

と。本当のそのイエスさまの本質がわかったのは、聖霊が降^{くだ}ってきてからでした。だから実は、見えども見ていなかったんです。イエスさまという形を見ていたけれども、本当は見えていなかった。でも、その形がなくなっちゃって——イエスさまが十字架につかれて、もう形がなくなった時に——イエスさまという姿が見えてきた。しかもそのイエスさまの姿というのは、あの生きておられた時のイエスさまと同じ姿かたちでありながら——見えない、肉体ではないけれども霊体のイエスさまというか、形を持ったししかも形なきイエスさま——その本質が見えてきたんですね。私たちもそういう主さまを思い浮かべている。

水の上を歩いてきてくださるイエスさま、病める者に手を按^おいて助けてくださるイエスさま、ナインの若者に向かつて「起きよ！」と仰るイエスさま。そういう、福音書でいくつものイエス・キリストのお姿が描かれています。十字架にかかっておられるお姿、そういうような非常に具体性を持っている。非常に具体性をもったその主イエス・キリスト、そのお方に「主さま！」と祈るんです。

「祈る時に、そういう福音書に表われたイエスさまのイメージを想像し、髻^{ぼうふつ}とし

てそれを思い浮かべながら、主さま！と祈れ」

というふうに私は導かれました。小池先生もよくそういうことを仰います。どこまでもリアルに祈れるためには、そういうお方を——福音書の場面のイエスさま、罪の女を赦しておられる場面もあります、いろんな場面があります——そういう愛そのものである、慈しみに満ちたそういう主イエス・キリストというお方を我々は思い浮かべながら、そのお方に「主さま！」と祈って行く。その一番根源的なお姿は、十字架にかかっていらっしやるお姿です。

「彼らを赦してやってください」

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と叫ばれたあのお姿です。それは我々にとっては光なんです。そういうお姿を思い浮かべて、その方に祈る。



《神は本来「隠れて在ます神」（イザヤ45・15）である。神意は深遠無量である。人間の合理的思惟（理性）でつなずかれるような神は神ではない。御利益的に拜まれるような神も神ではない。この惨憺たる人間界、自然界を傍観しているかの如きひどい神が神なのである。人間をして傍若無神の如くふるまわせて知らぬ顔の如き神が神なのである。

「わが神、わが神、何で私を棄てなされた！」

とイエスをして叫ばしめた神こそが神なのである。矛盾、逆説はなはだしき神である。このひどい神が実はおどろくべき靈法の神

この「靈法」の中身は愛ですね。そういう、

靈法の神であることが、いずれわかるときが来る。それは今は秘められている。「最後の審判」という表現をもって示されている終末のときに判然とするにちがいない。このような無神であるかの如き神こそ最も畏るべき神なのである。概念的表現をもってするなら、対極を絶した無量の愛の神なのである。

二〇世紀の文化文明が、いかに危機的様相を呈して来たかは火を見るより瞭らかである。文化文明の諸現象の根底たるべき高次な宗教の根が腐って来たなら、文化文明という大木はやがてぶっ倒れてしまう。真の人間性回復のためには、強烈なる靈性、深遠なる宗教性を要する。今や靈的人格の飢饉である。この靈性なきところに本當の生命も愛もない。神、キリスト、聖靈の靈性は、無限無量の力をもった愛である。活現自在なる本願愛のキリストは万人の中に活きてはたらかんことを本願して居給つ。》

「活現自在なる本願愛のキリスト、上から迫り給うキリスト、その方は万人の中に活きてはたらきたり」

と、そういうご本願を持っていてくださる。この序文が本当にこの「無的実存」の以下の文章のまとめですね、そういう思いがいたします。

●イザヤ書40章

「人間の合理的思惟でうなずかれるような神は神ではない。」

と。イザヤ書はそういうように非常にスケールが大きい。だから、ちよつとイザヤ書を開いてください。イザヤ書40章の9節から。

「9よき音信をシオンにつたうる者よ、なんじ高山にのぼれ。嘉きおとずれをエルサレムにつたうる者よ、なんじ強く声をあげよ。こえを揚ておそるるなかれ。ユダのもろもろの邑につげよ、なんじらの神きたり給えりと。10みよ主エホバ能力をもちて来りたまわん。その臂は統治めたまわん。賞賜はその手にあり。はたらきの値はその前にあり。11主は牧者のごとくその群をやしない、その臂にて小羊をいだき之をその懐中にいれてたずさえ、乳をふく



まする者をやわらかに導きたまわん。」(イザヤ40・9-11)

この「主は牧者のごとくその群をやしない」という、この「主」は正にイエス・キリストの姿です。神さまは超越的な神でありながら、実に降つてきて、一人ひとりを自分の懐に抱き給うお方である。

「その臂にて小羊をいただき、之をその懐中にいれてたずさえ、乳をふくまする者をやわらかに導きたまわん。」

と。これは牧者の姿ですね、実際のイスラエルの羊飼いのことですから。と当時に「羊」は我々自身なのであって、その「羊飼い」がまたイエス・キリストを表している。そういうふうな一人ひとりを取りを懇ろに顧みてくださるお方であるということを示し、しかもそのお方たるや、12節からは「超越の神」だということが出てくる。

この超越的な、宇宙万物を創り、その背後にいらつしやる物凄いスケールの大きな神さまと、自分の身近に降つてきてそこに一緒に住んでくださって導いてくださるというお方とは同一だなんて、我々はとても思えない。だから、思えないことを思えるようにしてくださっているのが聖霊です。

イエスさまというお方を我々の前に示して、そのイエスさまの分身ともいうべき霊、すべてを包摂できるような、すべてを受け入れることのできるような、そういう本当の霊知、そして生命、愛であり、その霊である聖霊。これが一人ひとりの中に宿る。それによって初めてこのスケールの測り知るべからざる大きな神さまの世界と、それから一番小さい微小なるものの中に宿り給う生命の世界、それが一つに統合されて、我々に受けとられる。これは聖霊の働きなんです。

イザヤ書ではそこまでのことが言われていません。だから、イザヤ書を本当に実現してくださったのがイエス・キリストであり、そしてそれを現実にしてくださったのが聖霊なんです。ですから、スケールの大きさをちよつとイザヤ書からみますと、

「12たれか掌心をもてもろもろの水をはかり 指をのぼして天をはかり、また地の塵を量器にもり 天秤をもてもろもろの山をはかり 権衡をもてもろもろの岡をはかりしや。13誰かエホバの霊をみちびきその議士となりて教えしや。14エホバは誰とともに議りたまひしや。たれかエホバを聴くしこれに公平の道をまなばせ、知識をあたえ 明通のみちを示したりしや。15視よもろもろの国民は桶のひとしづくのごとく、権衡のちりのごとくに思いたもう。鳥々はたちのぼる塵埃のごとし。16レバノンには柴にたらずそのなかの獣は燔祭にたらず。17エホバの前にはもろもろの国民みななきにひとし。エホバはかれらを無きもののごとく空きもののごとく思いたもう。」

一方ではそのくらいスケールが大きくて、この地に住める者たち、鳥々は埃のような存在だと。それでありながら、我々を顧みたまうというから凄いなだと。21節、



21 なんじら知らざるか、なんじら聞かざるか。始めよりなんじらに伝えざりしか。なんじらは地の基をおきしときより悟らざりしか。22 エホバは地のはるか上にすわり地にすむものを蝗のごとく視たもう。おおぞらを薄絹のごとく布き、これを住まうべき幕屋のごとくはり給う。23 又もろもろの君をなくならしめ地の審士をむなしくせしむ。24 かれらは僅かに植えられ僅かに播かれ、その幹わずかに地に根ざししに、神そのうえを吹きたまえば即ちかれて藁のごとく暴風にまきさらるべし。25 聖者いい給わく、さらばなんじら誰をもて我にくらべ 我にたぐうか。26 なんじら眼をあげて高きをみよ、たれか此等のものを創造せしやをおもえ。主は数をしらべてその万象をひきいだしのおおの名をよびたもう。(イザヤ40・12〜26)

よく「無から有を呼び給う」と出てきますね。

元々、見えざる何かがあるんです。見えざる何かがある。そこから引つ張りだして、世界を創りたもうた。ちょうど、クモの巣というのは面白いですよ、お腹の中からいくらでも糸が出てくる。そういうふうには、何か根源的なのがあつて、その根源的なのから引つ張りだしてこられた。それが天地の創造だという。本当のゼロ、ナッシングからは何も出てくるはずがない。そのナッシングといっているものは、目に見えない何かなんです。神さまの世界は、目に見えない何かなんです。そこから神の意志によつていろいろんなものが展開してきたんだと。それがこの

「万象をひきいだし」

と書いています。創造というのはそういうことだと。創造というのは、いわばじつと呻いて時を待っている、その世界から具体的なものを引つ張りだしてくる、創り出してくる、それが創造だという。愛の意志の働き、その実が創造だと。だから、

「主は数をしらべてその万象をひきいだし おおのおの名をよびたもう。主のいきおい大なり。その力のつよきがゆえに一も欠くることなし。」

そして、そういう神さまがあなた方の神なんだよと。「ヤコブよ、イスラエルよ、ユダよ」と呼びかけて、「何をブツブツ文句を言っているのか!？」という感じですね、ここからあととは「私のことを神さまはもう顧みてくれない」とか、「私がどんなに神さまに訴えても全然聞いてもらえない」とか、そんなことを言つて吠えている。28節、

「28 汝しらざるか 聞かざるか エホバはとこしえの神、地のはての創造者にして 倦みたるものごとなく、また疲れたもうことなく、その聡明こと測りがたし。」

29 疲れたるものには力をあたえ 勢力なきものには強きをまし加えたもう。

30 年少きものもつかれてうみ 壯なるものも衰えおとろう。31 然はあれどエ

ホバを俟望むものは新なる力をえん。また鷲のごとく翼をはりてのぼらん。

走れどもつかれず 歩めども倦まざるべし。(イザヤ40・28〜31)



そういうお方なんだと。そういうお方を、しかし、こう言われたって、我々には掴みどころがない神さまなんですね。それを我々に身親しく、

「我を見し者は父を見しなり」

と言って、我々の目の前に現れてくださったのがイエス・キリストです。しかも、その方は自分の意志で来たのではない。遣わされて来たんです。聖旨に従って地上に現れてくださった、そういうお方です。そして、御意にすべて献げきつて、最後は十字架だった。それをも受けとられた。こんな凄い方があるかと。だから、小池先生は、

「もうこのお方の前には圧倒される。このお方の前には平伏すほかはない。その十字架の贖いの愛の深さにただ涙するしかない。本当にその前に平伏した者でなければ、本当の世界には入れないんだよ」

と。しかも、先生は

「人間の側の悔い改めとか、砕けなんていうのは大したことない。本当の砕けは主ご自身が持つておられた。その本当の砕けを賜るんだ」

と言われた。

『わが砕けは汝のものなり、わが贖いは汝のものなり』と。イエスさまが成してくださったことは全部、あなたのためだ、それをあなたに差し出したいんだ」

と。これが本願なんです。ここまでの徹底的な無私の姿、それはないですよ。神さまの前に無私でいらつしやる。これは「父と子」の姿ですから、これはまだわかります。けれども、こんなダメのカス、しかも何十億といえるかもしれないそのダメのカスのために自分を献げて、自分は何ひとつ善きものを受けとられなかった。すべてのマイナスを背負いこまれた。そして、砕かれた、棄てられた。そして、我々に平安を与えてくださった。イザヤ書53章、こういうお方、それが我々の救主イエス・キリストというお方です。

このお方の中にあの測り知るべからざる神さまが100%そこに宿っておられるというんだから、正に天と地の接点、交わる点。そして、そこでこそ私たちは無限無量の世界へ入っていただけ。だから、このお方を離れて、我々はどこへも行きようがない。

地上でそこそこに生きることができません。けれども、土から出たものは土に帰る。有限なるものは有限でとどまる。それで満足な方はそれでよろしいんですけれども、我々は何かしらそこに虚しさを感じて、呻いていたんです。呻いていた時に、主イエス・キリストという方を示していただいた。そこで縋りついた。縋り付くということが「信」ですね。この信というものは、生涯貫かなければならないですよ。一回きりではない。ずっと生涯、主さまとの結び、一体化。それは生涯貫かなければ、どうにもならないですよ。

● アブラハムの生涯

アブラハムの生涯というのは、やっぱり凄いですよ。75歳で呼び出されて、



「天を見る、星を見る。お前の子孫はあのごとくなる」（創世記15・5）と約束されてから10年間待たされて、ハガルから子供が生まれます。しかし、

「それではない。イシマエルではない。サラから生まれなければダメだ」

と、神さまに言われて、そしてまた13年経つんです。やっと99歳。イシマエルが生まれたのが86歳のとき。旧約聖書にちゃんと書いてますよ。「カナンの地に住んで10年経ってから」と書いてある。それからまた13年待たされて99歳になった時に、

「アブラハムよ、アブラハムよ！」

「はい、何でもございましょうか？」

「お前に子孫を与える」

という。「いやいや、もういいですよ」と、「アブラハムは笑った」と書いてある。

「アブラハム、心の中で笑いき」

と。だから、あそこを見ますと、アブラハムは信じてはいませんよ、神さまのことを本気では。笑っているんですよ、

「こんな99歳の人間にどうして子供が生まれようか。私は25年間も待ったんです。

サラは90歳です、無理ですよ」

と言つて笑った。でも、神さまはそれを咎められない。どんどん、自分の御意を押しつけてかれる。だから、アブラハムは救われているんですよ。もし、「ちよつとでも疑ったらもうダメ」なんて言われたら、アブラハムはもうダメです。

私は、アブラハムをあまり美化したくない。しかしやっぱり、イサクを献げたところはすごいです。あそこはもう、「これぞわが宝物」という、しかも自分が獲得したのではなくて、待ちに待つて自分の不信にもかかわらず、神さまが自分の信を貫いて、アブラハムを信じぬいて、そしてイサクを与えてくださった。

「このイサクを捧げろ、殺せ？」

と、もう頭の中はパニッククです。でも、黙つて、モリヤの山へ下男二人を連れて行く。ある所まで来たら、下男たちはそこで留めて、イサクと自分と二人だけで薪を担いで行く。

「お父さん、薪はあるけれども、犠牲に献げる燔祭の動物はどこにいるんですか？」

「さあね、神さまが備えてくださるだろう」

と。まさか「お前だ」なんて言えないものね。そういう体験をさせられたということが創世記に出てきます（創世記22・1〜13）。その創世記の15章もすごいけれども。

「お前に跡継ぎを与える」

と言われた。しかも、その「跡継ぎを与える」と言われて、その夜にすごい預言をくださる。動物の体を二つに裂いて、二列に置いておく。そこを火が通りすぎる。その時に与えられた言葉が、



「13時にエホバ、アブラムに言いたまひけるは 爾確かに知るべし 爾の子孫 他人の国に旅人となりて其人々に服事えん 彼等四百年のあいだ之を悩まさんと。エジプトでも奴隷の姿で苦しめられるということをもうあそこでも言われている。子供ができてないどころか、そのかけらも見出せない、そういうアブラムに対して、

「星を見る、お前の子孫はあのくらいになるぞ」と言い、そして、アブラムはそれを受け入れた。

「アブラム、エホバを信ず。エホバこれを彼の義となしたまえり」と。そして、

「カナンの地をお前の子孫に与える」

と言われて、犠牲を捧げて、その時にこの言葉が臨んだ。

爾の子孫他人の国に旅人となりて其人々に服事えん 彼等四百年のあいだ之を悩まさん 14 又其服事えたる国民「エジプト」は我之を鞫かん

パロに散々やられましたから、それでモーセを遣わして、ついに審かれた。

其後彼等は 大なる財貨を携えて 出ん

エジプトから出エジプトして行くぞと。

15 爾は安然に 爾の父祖の所にゆかん 爾は遐齡に達りて 葬らるべし

175歳まで生きますからね。

16 四代に及びて 彼等此に返りきたらん (創世記15・13〜16)

そして、「ずつとこういう地域を与えるぞ」という約束がここである。

それから、ハガルとイシマエルの話が出てくる。そして17章。

「アブラム九十九歳の時エホバ、アブラムに顕れて之に言いたまひけるは 我は全能の神なり 汝 我前に行みて 完全かれよ 2 我わが契約を我と汝の間に立て 大に汝の子孫を増さん 3 アブラム乃ち俯伏たり 神 又彼に告げて言いたまひけるは 4 我汝とわが契約を立つ 汝は衆多の国民の父となるべし 5 汝の名を 此後アブラムと呼ぶべからず 汝の名をアブラハム(衆多の人の父)とよぶべし

この時から「アブラハム」という。

其は我 汝を衆多の国民の父と為せばなり 6 我汝をして 衆多の子孫を得せしめ 国々の民を汝より起さん 王等汝より出べし 7 我わが契約を我と汝および汝の後の世々の子孫との間に立て 永久の契約となし 汝および汝の後の子孫の神となるべし 8 我汝と汝の後の子孫に 此汝が寄寓る地 即ちカナンの全地を与えて 永久の産業となさん 而して 我彼等の神となるべし 9 神またアブラハムに 言いたまひけるは 然ば汝と汝の後の世々の子孫わが契約を守るべし 10 汝等の中の男子は 咸 割礼を受くべし 是は我と汝等および汝の後の子孫の間の我が 契約にして 汝等の守るべき者なり 11 汝等其陽の皮を割るべし 是我と汝等の



間の契約の徴なり

そして、男子が生まれたら、必ず八日目に割礼を施しなさい。それは子供だけではなくて、奴隷の子供たちもそうしなさいと。

14 割礼を受けざる男児即ち其陽の皮を割らざる者は我契約を破るによりて其人民の中より絶たるべし

つまり、こんな凄い約束が与えられた。それを体に刻んで覚えるために、割礼ということがやりなさいと。先に約束があり祝福があつて、その徴として割礼というのが起きたわけで、アブラハムの素晴らしさのゆえに割礼を施されたのではない。先に約束があつて、そしてそのあとでこういう割礼というものを徴として与えられた。

15 神又アブラハムに言いたまひけるは汝の妻サライは其名をサライと称ぶべからず其名をサラと為すべし 16 我彼を祝み彼よりして亦汝に一人の男子を授けん 我彼を祝み彼をして諸邦の民の母とならしむべし 諸の民の王等彼より出べし 17 アブラハム俯伏して晒い其心に謂けるは百歳の人に豈で子の生まるることあらんや又サラは九十歳なれば豈で産むことをなさんやと

ちゃんと書いてあるんです。だから、「伏した」というのは平伏したというよりも「うつむいた」ということです。伏して、

「百歳の人間に子供なんて生まれるものか!？」

と、だいぶアブラハムもひねくれてきたのかもしれませんが、始めの頃から比べるとね(笑)。これは普通の人間だったらそうだと思う。でも、それを神さまの方が突破して、

「そんなあなたの心の不信、疑いなんてものには、私はビクともしない。私はわが思いをやりとげる。覚悟しろよ」

と、そういうふうな圧倒しておられると私は思います。

18 アブラハム遂に神にむかいて願くはイシマエルの汝のまえに生存えんことをと曰う

「もう13歳になつております。イシマエルをどうぞ子孫に、相続人にしてください。もう私は待ちくたびれております。あなたが仰つてくださった時はまだ75歳で、ある程度そうかと思つて待ちましたけれども、もう疲れました。サラも、あの時はまだ65歳で見込みはあつたけれども、もう今は90歳です。もう見込みはないんですよ」

と。

19 神言いたまひけるは汝の妻サラ必ず子を生まん 汝其名をイサクと名くべし 我彼および其後の子孫と契約を立て 永久の契約となさん 20 又イシマエルの事に関して我汝の願いを聴きたり 視よ 我彼を祝みて多衆の子孫を得さしめ 大に彼の子孫を増すべし 彼十二の君王を生まん 我彼を大なる国民となすべし



し²¹然どわが契約は我^{あくるとし}翌年の今頃サラが汝に生まん所のイサクと之を立つべし²²神アブラハムと^{ものい}言うことを^お覚え彼を離れて昇り給えり」（創世記17：1
〜22）

とあります。ですから、このイシマエルを生んだということはある意味では失敗だった。御意はそこになかった。どこまでも
「サラを通して子孫を与える」

という御意だったけれども、それがわからないものだから、

「お前の体から出る者が世継ぎになる。あのエリエゼルという僕ではない。お前の体から出る者だ」

と。そこでサラは、

「もう10年も経っていますよ。10年経っても、私の身の胎がまだ開かれないということは、私ではなくて仕女のハガルを通してあなたは子供を得なさいという、ひよつとしたらそういう御意かも知れない」

と、サライが言うわけです。アブラムも、

「ああそうかな」

と思う。ところが、子供が生まれそうになってから、ハガルの態度がでつかくなって、女主人であるサライを見下す。すると今度はサラは反逆する。それで、ハガルはアブラムに泣きつくわけです。

「いやいや、そんなことを言われたって、私はサラの前に頭があがらない」

と（笑）。それで堪^{たま}りかねて、ハガルは逃げ出す。逃げ出してしばらく行った所で、

「女主人の所に帰りなさい。私が守ってあげるから」

と、ちゃんとお告げがあつて、それで帰ってくる。それから1年経って、イシマエルを産むんですね。あとしばらくは、うまくいくんですけども、今度いよいよイサクが生まれて、よちよち歩きでイシマエルと仲良く遊ぶところでまたサラはそれを追い出すというふうな話が続いていきます。それから22章の所で「イサクを献げろ」という、非常に息の長い物語です。

ローマ書の4章に、

「¹さらば我らの先祖アブラハムは肉につきて何を得たりと言わんか。²アブラハム若し^も行為^{おこな}によりて義とせられたらんには誇るべき所あり、然れど神の前に³は有ることなし。³聖書に何と云えるか『アブラハム神を信ず、その信仰を義と認められたり』と。

これは本当はその時はまだ「アブラム」でしたよね。

「⁶アブラム、エホバを信ずエホバこれを彼の義となしたまえり」（創世記15・6）



と。これは一番最初の段階ですね。ところが、9節の所にも、

9……我らは言う『アブラハムはその信仰を義と認められたり』と。10如何なるときに義と認められたるか、割礼ののちか、無割礼のときか、割礼の後ならず、無割礼の時なり。11而して無割礼のときの信仰によれる義の印として割礼の徴を受けたたり、」（ロマ4・11）

と。こうなつてきますと、

「アブラハム神を信ず、その信仰を義と認められたり」

と、この言葉はさつきも言いましたように、創世記15章の段階では「アブラム」ですね。

「アブラハムが祝福された」

というのは、さつきの17章です。この17章では、この段階では「アブラハム」の信仰が義と認められた」ということは出てきません。だから、パウロの引用はちよつとそこが混同されているように思います。あるいは出典が違うのかも知れないけれども。出典が違うにしても、年代的にはかなり離れています。このアブラハムは約束をいただいて、そして、割礼のことが17章9節から出てきます。だから、おそらくこの99歳の時に、

「アブラハムよ、お前はよく歩んできた。これからもわが前に歩みて全かれ。お前を絶対に棄てないから」

と、神さまの方からどんどん一方的に約束を与えて、そして「割礼を受けろ」と。だから、「信仰によつて義とされたり」なんていうことは17章に出てきていませんけれども、結局前の15章の所がずうつと後々まで、ここへも及んでいるのだらうかと私は思いました。それから、このローマ書の4章17節の所、

「17彼はその信じたる所の神、すなわち死人を活かし、無きものを有るものもの如く呼びたもう神の前にて、我等すべての者の父たるなり。録して『われ汝を立てて多くの国人の父とせり』とあるが如し。

これも17章の所ですね。「アブラハムと名前を変えよ」と仰つた、その時のこと。

18彼は望むべくもあらぬ時になお望みて信じたり、是なんじの裔はかくの如くなるべしと言ひ給ひしに隨ひて、多くの国人の父とならん為なりき。19かくて凡そ百歳に及びて己が身の死にたるがとき状なると、サラの胎の死にたるが如きとを認むれども、その信仰よわらず、20不信をもて神の約束を疑わず、信仰により強くなりて神に栄光を帰し、21その約し給えることを、成し得給うと確信せり。22之に由りて其の信仰を義と認められたり。」（ロマ4・17）

（22）

こういう書き方は、創世記の記述とはちよつと合いませんよ、表面的には。ということとは、あの15章でまず「義とせられて」、それ以来躓きながらもずうつと来た。そして99歳の時に笑っている。心で笑つて、



「ああ、そうですね。イシマエルで結構ですよ」

と、そんなことを言っている。でも、神さまの方はずうつと変わらない。そして、アブラハムもここで腹を決めて、これだけイシマエルを推薦しても、そうでないと言われて、

「絶対に私はやってみせるから、わかったか」

と神さまに言われて、

「はい、わかりました」

といて、それからずうつとサライがイサクを産むまで信じ続けたと思います。

「そこまで仰るなら、私はもう信じますよ、信じたらええんでしょ！」

という、開き直り的な信仰ですよ。

「それでもいい。お前はそこまで神さまにねじ伏せられて、そのあと貫いた。イサクの時にも貫いた、献げる信において。その信だよ」

と。だから、非常に長いんです、生涯なんです。一回きり信じて喜んだと、そうじゃなくて、ずうつとその生涯、揺れ動きながら躓きながら、しかし最終的にアブラハムは常に主さまに、エホバの神さまの所へ帰って行つたと、私はそう受けとりた。

アブラハムも迷いやすい人間ですよ。よその国へ行く時にはサラに対しては、

「お前を妹にしておくよ。お前は美しいから、私は殺されるかもしらん」

と。つまり、夫のアブラハムを殺して、サラを横取りしようなんて思われたら困るから、お前は妹になっていてくれと。二回出てきますよ、その話が。そのくらいアブラハムも人間的なところがものすごくあるわけです。

そうかと思うと勇ましいですよ。ロトがあのだムの王様たちとの喧嘩に巻き込まれて奪われて行つた時に、一族130何人かを連れて行つて奪還してくるところがある。そして、カナンへ戻ってきてから、あの神さまの言葉が臨んだというふうになっています、14章で。だから、アブラハムもやつぱり一族郎党の主として非常に勇ましい力強い男らしいところが一方にある。それでいてまた奥さんとの関係では、ああいうこともやってしまう（笑）。女同士の喧嘩が起るとオロオロしているという面もあるし、神さまの前にも、うつむいて心の中で笑つてみたりとか、非常にそういう意味で人間的なところがある。

しかし、人間的弱さとか、そんなことを神さまは問題になさらない。そういう人間の側の弱さとか何とかが、神さまの御思いを妨げるなら、もう人間は絶望なんです。神さまが一遍しようと思われたら、それをグーツと貫いていかれる。そして、貫きつつ鍛えあげられていかれる。最後に本当に鍛えあげられたのが、イサクを献げるといふ姿において鍛えられた。それで本当に神さまは満足されたと思うんです、

「よし、お前はそこまで私を信じたのか。己の独子^{ひとりご}を献げるまでに私を信じた。よしー」

と。そういうふうな生涯だと思うんです、アブラハムの生涯というのは。



私たちは、イエス・キリストという素晴らしいお方をいただいて、そして、その方はことごとく我々の不信仰も弱さも全部荷なつてくださって常に、

「大丈夫だよ、大丈夫だ。私がすべてを成し遂げたよ」

と。アブラハムは神さまと一対一で対面していますから、これはなかなか大変ですよ。私たちはイエス・キリストという方が常に抱いていてくださっているんです。

「み霊の我が主はわが身を抱き」

〔註：召団讃歌B2「使徒らの昔を」。「1使徒らの昔を慕いて我は 聖書に読み入り祈りてあれ

ば み霊の我が主はわが身を抱き 十字架に耐え得る力を賜う」

という、そういう所に入られている。そのことをしっかりと自覚していただきたいと思うんですね。

●第一章 無者=無的実存者

それでは、本文の所に行きましょう。本文は所々飛ばします。そして所々拾い読みというかたちでいきます。

《第一章 無者=無的実存者》(マルコ10・17-22、マタイ19・16-22、ルカ18・18-22)

無者！ こう唱えるとき、私の念頭にあるは唯だイエス・キリストのほか何者でもない。イエスは無的実存そのもので在ますからである。……

そして、あの「富める青年」との問答が出てきます。「天上天下唯神のみ」と、神以外に善きものなしという。そういう方が、

「我をなぜ善きと言うか」

と、あそここの所ですね。それから、ヨハネ福音書で、

「自分からは何も言えない、何も教えることはできない」

と言われた。そういう神の前の平伏しの姿のことが出てきます。そして288頁(新286頁)の真中の所、

「主の祈りの中心は正に身を神の前に投げ出しておられるところにある」という。

「汝の御意の成し遂げられんことを、天における如く地においても」

これは自分を献げておられる姿だと。それを完璧になしとげられた。これは「イエスの全実存、全生涯の祈願である」ということが出ています。そして、

《わが意志でなく汝の意志を》

は正にゲッセマネの祈りが白熱的にこれを告白し、彼は世のそむきと罪の一切を一身にひきつけて、神の審きの下に立ち、十字架にかかり給った。

次の数行は素晴らしい所です。

全生涯を貫いて神意体現を実行して来られたイエスを、神はいきなり旧約の靈能豊



かな預言者エリヤよりもはるかにすばらしく天界に入れなざりたかつたであろう。神の愛と義は実存者イエスにおいて渾然一如であったがこれが十字架で裂かれて、さばきの義、あがないの愛として砕きまた砕けて、復活のキリストの中に新しき一となって顕現した。

本来、イエスという方の在り方、これは神さまといつも一如。義も愛も渾然一体。神さまといつも一体であった。それが我々の罪のゆえに、そして我々を救わんために、それが一端引き裂かれて、壊された。しかしながら、復活という事態において、そこでまた父と聖子との一体が成就した。しかも、昔において一体であられた時よりも深い愛の姿です。つまり我々の罪の贖い、救い。神さまが直接には我々をどうしようも出来なかつたことを、イエスというその聖子において、我々を救い上げ、神さまと我々を一つにするという、その御業を成し遂げた上での、また一如。そこへと展開したということです。

神の愛と義は実存者イエスにおいて渾然一如であったがこれが十字架で裂かれて、さばきの義、あがないの愛として砕きまた砕けて、復活のキリストの中に新しき一となって顕現した。義にして愛であった実存の果として、いきなり天界に入りたかつたであろうイエスの正当な「わが意」すらも十字架にかけて、神意に従い贖罪の大業を果したイエスの無私！これを無的実存という。このような無私なる無の内実は無限無量である。それは決して虚無でもなければ空無でもなく、また禪宗の無とも質がややちがう。さとりは無よりも実存的な、倫理的な、しかも神秘的な投我、おのれを与えてやまぬ無私である。その内容が無量であるというのは、福音書を開けば直ちにわかるように、驚天動地の愛であり、乾坤貫徹の義であるからである。《

「神に対して『然り』と言う、それが信仰だ」

ということが出てまいります。289（新287）頁の最後の行、

《…別な言い方をすれば、信ずるとは「神に即して然りとする」ということである。すると、この信じ方を「神は彼に対して『義（セデカー）』と見なした」が直訳である。

神さまに即して「然り」と言わないといけない。自分の一方的な思いで勝手に「然り」と言っているのではない。「神さまがそう仰っているのだから、そうです」という、神さまに即して「然り」と言う。そういう受けとり方を「義」とみなしてくださいと。

すなわち、神の意志を、聖意を全実存的に「然り」と体受し、自己を全実存的に「否」と棄てること、これが信仰であり、そこから「義」の宣言がくる。義とは、そのように神の聖意が全実存的関係において立てられている事態を言う。決して一般に思われているような「正義」ではない。

そもそも我ら人間の罪の中の罪は、神の意志に対しておのれの意志を主張する我意である。これがすなわちサタンのな反逆心である。それゆえにイエスは神意の前に「自



己の意志に非ず」ということを最深の自覚としていた。これが福音的無私、無我である。このようなたましいの在り方を私は無的実存というのである。そしてパウロによれば、自分の側、人間の側を肯定することが肉であるから、聖意を立てることが福音的な意味の霊的ということである。神意が全実存的に受けとられ、神意がその全実存を貫いている事態を霊的という。決していわゆる心靈的な霊的ではない。それゆえ「無的」ということは、「聖意の受けとられている」現実であり、その内実は「義」であり、その事態は「霊的」ということである。無―義―霊、これは不可離の相関的、円環的、一貫的概念である。およそ福音的諸概念は、実に十字架を要とした有機体的な関連の内実をもつものであって、神学者や聖書学者がややもするとおちいり易い分析的な諸概念ではない。

このような聖意に全実存の貫かれていることが義であり、イエスこそ真の義者、義人であるが、さてその聖意そのものの深奥の内実は何か。それは「神は愛なり」において表現されている愛（ヘセッド、アガペー）である。

聖意が貫かれている事態が義だと。しかし、どういう聖意が貫かれているのか、聖意の一番深いところは何かというと、「愛する」ということ。神さまが我々を愛してくださいというということ。その神さまの愛が直接的に我々に貫かれない、妨げがあった。それが我々の方の罪、我意ということ、それが障りなんです。その我々の方の妨げを取っ払ってくださったのが十字架ですから。そうすると今度は、十字架を受けると、神さまの愛がストレートに流れ込んでくる。

人間が神を表現し得る最深にして最後の言は何といっても「愛」であることは、聖書の啓示が示す通りである。しかし、この「愛」の内容と表現は多種であり、劇的であり、矛盾的であり、不合理、非合理、超合理である。むしろ「愛」という概念ではわりきれない場合が現実にはしばしばである。「ひどい愛」であるという方が、神の神らしい愛である。そういう「ひどい愛」「わからぬ愛」は無限無量な深刻なもの、それを無量愛というか。そのような無限定の愛を信じ抜くところに、義がある。そのような神と人との愛信の関係を義とはいつ。》

私たちの信という事態も、
「こういう善きことが身の回りに起こってきているから、だから、神さまを信じましょう」
とか、

「変なことが次々と起こるのは、もう見捨てられているのではないだろうか」

とか、現象に囚われないことです。現象に囚われたらダメ。どんなことが身の回りに起こっているかというと、プラスであれマイナスであれ、すべて主さまの御手の中にある。主さまが私たちを愛して離し給わない。相対的な現実なんか問題にしない。主の愛というのは徹底



的に貫いていくんです。それだけの凄い愛なんです、キリストの愛というのは。そこをしつかり受けとってほしいんですね。どうしても、私たちはいろんな善いことが起こると、

「ああ、主さまは素晴らしい、素晴らしい。祝福されている！」

という実感はできませんよ。けれども、決してそんなものが何も伴わなくて、むしろ落ち目で、周りにいろんな不如意なことが起こり、四面楚歌しめんそかである。そんな時でもキリストの愛は変わらない、貫くんです。それを「ひどい愛」とか「わからぬ愛」とか、小池先生は表現されたけれども。キリストは命を懸けてあなたを愛してくださっているお方なんです。正に生命を十字架に懸けて、

「われ汝を愛す」

と言って、駆け寄ってきて、宿ってくださいるお方なんです。そのお方がいらつしやるのに、我々は棄てられるはずがない。だから、何が起ころうとも、主さまは愛である。

「主、われを愛す。主は強ければ、われ弱くとも、恐れはあらじ」

という讚美歌(46番)を我々の歌として行く。これが我々の側の信ですね。主の愛に応える我々の信です。

それから次に、「律法の根源は聖意志にある」という、この義が律法において顕れますから、そこで律法のことが出てくる。

《律法の根源は聖意志にある。神がヤウエー神として「わが民」イスラエルと結ん

だ「契約」のしるし、保証としての「律法」の根本精神は、神のイスラエルへの信愛の断言命法であった。》

神さまがイスラエルの民を信じ愛し、そして「十言」を与えられた。それは御意の顕れであった。しかも、その御意の中身は、「すべし、すべからず」ということは出てきているけれども、それは

「お前は私の民であり、私はお前を愛しているから、お前は殺人など出来っこない。

盗みなど出来っこない。私を信じてやまないはずだ。」

という信愛の呼びかけの断言的な宣言であった。信愛の貫きであったと。その信愛に対して信愛で応えればよかったんだけど、それが人間の弱さのゆえに、そこで躓いたというわけですね。292 (新290) 頁の行が変っている所、

《このように、深い神の信愛のこもった「十言」が義である。「神の義」は律法の中にすでに福音的な意味でかくされていたのである。この神の義たる律法を内がわから完全に受けとめて充たしたのがキリストである。だから「神の義」はキリストの福音の中にあらわに、もっと積極的な内実をもってあらわれて来た。それはキリスト・イエスが、神の義を全うし、神の律法を成就し、神の義そのものとなり給ったからである。そしてその「義」を贖罪の十字架を以て人に与えたもったからである。それゆえイエスにおいてあらわれた神の義は直ちに神の恵みであり、神の愛である。このことはイ



ザヤ書にすでに預言的に告知されている。……義と救とが同義語として用いられている。……

293 (新291) 頁の真中の所、

聖意を実存をもってつらぬいたイエスは、神からアブラハムよりもはるかに深い意味において、実質において、決定的に神から義とされた。

アブラハムでさえ義とされたのならばましてイエスにおいてをや、というわけですね。イエス・キリストは本当に全生涯を義をもって貫かれた。神さまの御意を立て給うた。だから、決定的に義とされた。

否、実に神の義そのものとなった。しかも聖意は深い信愛であるから、キリストの義の内実はつねに旧約の律法を超える積極的な愛で、パウロのいうように、

「愛は律法の完成である」(ロマ13・8、10、コロサイ3・14)《

ところが、この神の信愛を人間の方が裏切ったというわけです。

294 (新292) 頁へ行きます。アモスとかミカというところに既に愛が表われている。旧約の世界は義の面が強けれども、イザヤ書がそうですし、ミカ書やアモス書にもそれが出てきている。

《「人よ、彼さきに善きことの何たるかを汝に告げたり、ヤハウエーの汝に要めたもうことは、唯だ義を行い、憐れみを愛し、謙遜りて汝の神と偕に歩むことならずや」(ミカ6・8)

それから、アモス。

「公道を水の如くに義を尽きざる河の如く流れしめよ」(アモス5・24)《

こういうふうには、義と愛とは一つであるということなのです。

《ところでイエスが全ったのは「律法」の根本精神であり、預言者の精神の根底にあったものである。聖意を体現したイエスが、聖意に従わない人類の不義を負って、神の聖意貫徹たる義の審判を身に受けたのが、イエスの十字架の第一義であったから、パウロはあのように言った。しかし、このイエスの十字架の義を信受する者は、このイエスの義を賜わる。》

「恵みにより信仰により」という。そして、パウロの告白、ガラテヤ書2章20節、

「我キリストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、御霊のキリスト我が内に在りて生くるなり。」

というところです。それから295 (新293) 頁の真中の所が大事な所です。

《キリストの十字架の砕けによって、私は砕かれている。死んでいる。罪から解放されている。無私無罪の「無」を賜わっている。これを全存在を以て信受している事態然り、主のあの十字架の贖罪の事実が主体主語となって、私に事実を以て宣言しておられる事態である。これが私の救のたしかである。》



この4行は物凄く大事な所です。

「キリストの十字架の砕けによって、私は既に砕かれている。私は死んでいる。私は罪から解放されている。」

という、根源現実です。

「無私無罪の無を賜わっている。これを全存在を以て信受している事態、然り、主のあの十字架の贖罪の事実」

「贖罪という事実」という。

「十字架の言は、亡ぶる者には愚かなれど、信ずる我らには、福音にあずかる

我らには、神の力なり」

と、あれと同じです。主のあの十字架という事実が、

「十字架の贖罪という事実が主体主語となつて、私に事実を以て宣言しておられる事態である。これが私の救のたしかさである。」

「私の方に強い信仰がある。私はそれを確信している。私は信じ続けています」とかいう、私の方に根拠がなくて、その十字架の事実が迫ってきて、「あなたは大丈夫だ」と、そちらの方に確かさ、根拠がある。こちらの主観的な信仰ではないという。「コペルニクスの転回」といいますね。「私の信仰」とか、

「私がこんなに強い信仰をもつてイエスを信じ続けているから、だから、救われて
います」

とかではない。私はさつき、「アブラハムなんて大したことない」と言ったのはそれなんです。神さまの方の恵みがきている。そういう圧倒なんです。イエスさまの十字架も、そうやって我々を圧倒してくださっている。こちらの信が強いとか弱いとか、有るとか無いとか、そんなのじゃないという。だから、先生は、

「私は信仰なんでもものは要りません。信仰なんかありません。私はイエスさまに圧倒されているだけです。イエス・キリストに圧倒されて生きています。信仰なんかありません」

と言われたのが、よくわかります。どこまでも、神主体の、神の御業みわざなんです。救いは神の御業であつて、神さまが主人公で、神さまが我々に働きかける。それもイエス・キリストという具体的なお方を通して働きかけておられる。そして、イエスは実力をもつて、実績があります。

「あなたの罪を贖った。もう罪は無いんだよ」

「いえ、まだ私の中に汚い心があるんです、憎しみの心が時々湧くんです、妬みの心が湧くんですけど」

「それがどうした。そんなことが問題になるなら、救いではない」

と。我々の側のそういう信・不信、そういった我々の側の相対的な善悪、信仰があるとか



信仰がないとか、心が潔きよいとかが潔くないとか、そんな相対的なことが問題になるなら、神さまの救いではないと。神の救いはそれを突き抜けた、一極絶対の次元から降ってきている救いだから、「我々の側がどうである」とか、そんなものはぶっ飛ばして、貫いて成就する。そういうのが絶対性なんです。救いの確かさ、絶対性ということ。

これに気づいたらもう、しめたものです。そのかわり、絶対に自分を誇れないですよ。生まなの自分がそんな神さまの前に立てるような人間ではない。そんな殊勝な人間ではない。死に至るまでそうですよ。でも、この一極絶対の神さまの贖い、救いが主体となって、圧倒して降ってきて、そして我々の中に宿る。宿ってしまうんです。そして、「宿ったよ」という徴として聖霊が宿ってくださっている。聖霊が助けてくださるんです。聖霊によらざれば、

「主イエスキュー！」

とは呼べない。「主イエスキュー、主イエスキュー」と呼んでいるということは、聖霊が促してくださっているんですから。その神さまを呼んでいる時は、本当に平安ですよ。「主さま」と呼んでない生活は何か落ち着きがない。だから、必ず「主さま、主さま」と聖名を呼ぶだけでいい。他の知識は要らない。他の大事なことはここで先生を通していろいろ学んで、知らない間に体にしみ込んでいきますから。普段の生活は、

「主さま、主さま、主さま、感謝です、アーメンです、ハレルヤです！」

と、それでいいんですよ。だから、ここの「救いの確かさ」という、ここの所は本当に大事です。

《パウロと共に「十字架につけられた」と告白できる絶対恩寵の信仰の現実である。》

「根源現実」と言い換えたらいいですね。生まなの現実ではない。神さまが無条件にくださっている根源現実。肉の眼で見ることのできない、感性で受けとることのできない根源現実です。それが、「あなたは大丈夫だよ」と、そう告白させてくださる。

キリストの無的実存の事態を恩寵として受けとることのできる所以ゆえんはここにある。しかし生まの現実私は罪びとに過ぎない。キリストの十字架は死に至るまで私に不可欠の罪のゆるしの恩寵、

これなくしては私はやり切れないという、この罪のゆるしを与えてくださる恩寵、

贖罪愛である。十字架を通して神の義と愛が一貫一如の恩寵として私に臨んだ。直接に臨むはずであった神の義と愛とがわたしの罪のためにどうしても十字架を通して来なければならなかった。罪びとたる私たちは十字架を通して始めて神の義も愛も一貫一如の相で受けとる。

神の直接愛は我々の罪のために北森氏のいわゆる「神の痛み愛」とはなったが、一度キリストの十字架の砕けの愛を経てからは、聖霊の降臨によって圧倒的な愛となつてのぞんでくる。



この聖霊の降臨によって愛となつて臨んできて、「もはやもう神の痛みなんてどこかへすつ飛んでいるぞ」ということを言つておられる。

十字架の砕けの愛にも拘らず、我々が罪びとである限り、神の側に痛みはのこるとしても、キリストの砕けの愛のゆえに、神の痛みはうちにかくされ、神はみたまをふりそそぐよろこびの愛を以て我らに臨み給つ。

ここで「よろこび」というのが出てきます。よろこびの愛をもって我らに望み給う。

みたまにこもる神の愛は、光を放ち、力にあふれ、生命を与える。そこに痛みは全くかくれてしまっている。十字架の砕けの愛を通してもなお神の痛みは愛が前面にでていたのでは、我々がやりきれない。

そうですよ、いつまでも神さまが痛んで、「痛い、痛い」と言つておられたら、我々は申し訳なくて苦しんでしょうがありません。小池先生はここで遠慮がちに書いておられるけれども、「痛みの愛なんてすつ飛んでいる、そんなものはもうないよ」とハッキリそう言いたいんです。

我々に直接関わりをもたしめ給うのは正にキリストの十字架の砕けの愛で、そこに無罪無私の恩寵の現実が与えられ、そこに直ちに聖霊の歓喜の愛が圧倒的にのぞむ。

直ちに臨む。十字架に気づいて、感謝して平伏したら、そこにもう直ちに聖霊は間髪を入れずに臨んでくださっているんです。

復活、新生のよろこびがつねに新たにくる。それでこそ福音である。イエスが受洗されたとき、臨んできた聖霊と共に、聞こえてきた天来の声は

「汝はわが愛しむ子なり、我汝を悦ぶ」

であつたではないか。

これは、同じ御声が我々にも聞こえてくる。

聖霊は歓喜のみ霊である、愛のみ霊である。》

それから少し飛ばしまして、内村鑑三の言葉が出てくる。

「自分を神・キリストの中へ投げ込んで、神・キリストと一体となること。これが

信仰の極致だ」

という、『一日一生』の5月31日に引かれている言葉が出てくる。297（新295）頁の終りから6行目（新3行目）の所に、

《キリストを信ずるとは彼の神格の中に我が人格を投入することである。そうして我を無き者として彼をして我に代つて我が衷にあらしむることである。是れが即ち信の極であつて、キリストは我等より斯かる信仰を要求し給うのである。

これは素晴らしい。神さまと一如であると。しかしながら、一つ抜けているところがあるということを書かれている。聖霊ということが出てないではないかと。内村鑑三先生が、キリストの中に自分を没入して、キリストと一体となつて神と一体になる。それをなさし



めてくださるものは何か——自分でストレートにそれも出来ない——聖霊なんだよと。

なお一つを欠いている。それは聖霊の事態がこの中に入っていないことである。ここに述べられてあるキリストとの一体の事態を可能ならしめるもの、それは上にも触れた如く、キリストの十字架の贖罪が私を、根源的に罪「無き者」、私「無き者」とし、無的実存の根底を与えて下さったこと、そしてみ霊のバプテスマにあずかり、「キリストわが中に」という現実をみ霊の内存在をもつて与えて下さること、これである。》

この聖霊というのがやっぱり私たちには一番大事なんです。だから、「自分の信仰がない」だとか、「信仰が弱い」だとか、そんなことはもちろん問題ではありません。そうじゃなくて、聖霊というお方が我々一人ひとりを常に十字架の主さまと結びつけ、天界と結びつけ、我々を天国人として生かしてくださる。

だから、いつもここへ帰ってきてください。自分が弱くたっていい。それは聖霊が助けてください。聖霊は執り成してくださる助け主です。ヨハネ伝にあります「たすけぬし助主」です。いつも身親しくそばにいて助けてくださるお方です。そのお方をイエスさまは我々に送ると約束してくださった。そして約束が成就したんです。使徒たちの群れにおいてはペンテコステで成就しました。

それ以来、我々に常にそれは開かれている。そして我々がどこでも祈り、「主さま！」と呼んでいる時に聖霊がくだって我々を満たしてください、喜ばしてください。時には、大集会なんかで本当にあのペンテコステのような現象的なことも出てきます。それを体験なさる方は恵みですよ。けれども、体験にこだわらないでください、いつも申しますように。申し訳ないけれども、私はそういう体験がないわけなんです。でも、私のうちに聖霊が来てくださっているということは、私はもう今は疑わない。

むしろ、アブラハムの生涯がずうつと貫いて信の生涯であったというように、我々はそういう聖霊に助けられていくのが、聖霊に導かれる生涯だと言いたい。時々、そういう凄いいことを体験なさっても——それは恵みですけれども——日々の祈り、日々、「主さま！」と呼ぶ時に、いつもそれは御霊の執り成しによる祈りであるということですよ。

「御霊は我らの弱きを助けたもう。我らはいかに祈るべきかを知らざれども、

御霊言ひ難き呻きをもて我らを執り成し給う。そして、御霊の思いを知り給

うお方は、神さまはすべてを益とならしめ給う、万事益とならしめ給う」

と、あのローマ書8章ですね。そういうことをいつも我々に思い起こさせてくださるんです。だから、新約聖書をお読みになる時にも、そういう角度から新約聖書は、自分たちをアシスト (assist 助ける) してくれる、サポーターとしてアシストしてくれるものです。この罪の世にあつて、喧噪けんそうの世にあつて、およそ神さまを信ずる人たちはどこに居るのかと思う世の中にあつて、キリストのことを口に出すのが憚はばかれるような世の中にあつて、キリストを言つた途端にみなしらけてしまうような世の中であるにも拘かわらず、いつも



「あなたは大丈夫だよ、大丈夫だよ」

と助けてくださる、そういう書物として新約聖書があり、そして旧約聖書の預言書があり、アブラハムのああいふ記述がある。すべてこれらは我らを助けて、キリストとの一体感をいつも保証してくださるのが聖書でありますから、これを「審判の書」として読んだらとんでもないですよ、本当にね。

私も旧約聖書を開くのが恐かったですよ、教会にいた頃は。なにか読んだら審かかれていような気がしてしようがない。

「あなたはダメだ、あなたはダメだ」

と言われているようで、開きたくなかった。

旧約聖書は旧約聖書の限界があります。あれはイスラエルの民族を導くための書だったから。でも、そういう限界のある旧約聖書の奥にキラキラ光っているもの、それを引っ張りだしてこられたのが小池先生でありますし、元祖はイエス・キリストご自身です。同じ旧約聖書を使いながら、なぜイエスキリスの受けとり方と、当時の人々のリーダーたちの受けとり方が違うのか。もし一つだったら、十字架にかかられないですよ。

「旧約聖書の教えに反している」

と言って、キリストを十字架につけて殺したんですから。同じものを材料にしながら、まるで違う。それはイエスという方は自分を投げ出して、そして神さまの御意をすっかり受けとっておられた。それは愛の御意でしたから。神さまのみふところの中でその愛の中から旧約聖書を読まれた。自由自在だったわけです。いつも祈っておられますから。

それが露わな姿で新約聖書で我々に表された。小池先生という素晴らしい導きの告白が我々に今、目の前に置かれていますから、こういうものを本当に大事になさってください。祈り心に導いてくれる本が素晴らしい本なんです。恐れをいだかせる本はダメです。祈り心に導き、祈らしめ、そして「主さま、主さま！」と感謝できる、そういう告白に満ちているような本がいい本です。新約聖書も正にそうです。そういうことで、皆さま、キリストの愛の中に進んで行っていただきたい思います。

最後に308(新307)頁の所を見ておきましょう。ゲーテの『ファウスト』の「元始に言があった」というのを「元始に行為があった」とむしろ言いたいということもいつも先生は仰っています。

《……しかし私は言いたい、

「元始に信があった」(Im Anfang war die Glaube)」

と。「信は神と偕にあった。信は神であった」である。信が根源であってこそ、発しては言となり、動いては行となる、である。「全信無行」の全信も私されてはならない。神わざである。むしろ人間の側からは絶信の信なのである。

自分の信仰には絶している、そういう信だと。



信仰が変に凝りかたまると、それは鼻もちならない。何か信念的な、私された信となる。自分の信仰などはあてにならない。そんなあてにならない信仰をあついのうすいのと問題にするのは、そもそも間違いである。あてになるのはキリストだけである。だから逆説的に言わざるを得ない。自分の信仰など棄てろ、と。自分の信に絶するところに上から「神のわざ」としての「信」がぞむ。それこそがキリスト主体の信である。これは正に聖霊の内実をもったものである。これらの事態はいつも十字架を焦点としている限り本ものである。しずかな深い祈り心がそこにある。《

「キリスト主体の信は聖霊の内実をもったもの。これらの事態はいつも十字架を焦点としている限り本もの。そこには、しずかな深い祈り心がある」

と。そういう、極めて単純なものであります。

それではこれで一応、この「無的実存」の所を駆け足でしたけれども、皆さま、またあとで通してお読みくださいませ。

● 祈り

それではお祈りいたします。しばらく合掌していただいて、主イエス・キリストさまを、どうぞ、眼前に髣髴ほうふつとして思い浮かべていただき、海の上を歩いて渡って近づいてきてくださるキリスト。

また、人々にパンを裂いて与え給うキリスト。

按手して、「癒えよ!」と叫んでくださるキリスト。

「汝の罪ゆるされたり。安らかに行け」と仰ってくださいるキリスト。

エマオで弟子たちにパンを裂いて与えてくださったっているキリストのお姿。

「われなり、懼るな、心安かれ!」と迫ってくださいるキリスト。

十字架にかかって、「彼らを、父よ、ゆるしたまえ。そのなすところ知らざればなり、

「なんぞ、われを棄てたまし」と叫んでくださったキリスト。

「わが霊を御手にゆだね」と。そして、静かに息を引き取られた主さま。

しかし、三日目にあのようにして忽然こっぜんと現れて、新しい天地をつくってくださいった、

天地を全く新しくしてくださいった主イエス・キリストさま。

今も霊界にあつて、天界にあつて、燦然さんぜんと光輝いていてくださる主イエス・キリ

ストさま。

「われなり、懼るな、心安かれ!」といつも我々のところに降りきたり、按手して

くださっている主イエス・キリストさま。

ありがとうございます。本日ここに、主にある兄弟姉妹たちを御集めくださり、あなたのことを小池先生の著作を通して、今ひとたび深く味わい論さとしていただきましたことを心から感謝をいたします。救いの確かさは、主さまが主体となつて、十字架という根源的



な贖罪愛をもって我々に無私無罪を宣言し、

「お前は問題なし。われ汝を愛す」

と、呼びかけてくださっているその呼びかけ。あなたの御思いの中に、事実の中にそれは打ち立てられてであると。

主さま、我々はただ全存在でそれを、平伏し感謝しお受けする、「アーメン！」とお受けする、それだけです。主さま、深い静かな祈り心をもって主さまを限りなく受けとっていく、主さまの中に身を投じていく。

「われ既に主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず、復活の主、御霊の主、わがうちにありて生きたもうなり」

と、これを根源現実として感謝して、日々、告白しつつ、聖霊の喜びの愛をいただいで、輝きをもって前進していくこと、これをあなたは望んでくださっています。望みなぎところにも常に本当の望みを与えてくださり、道を開いてくださる主イエス・キリストさま。聖名を讃え、感謝を申し上げます。

外は烈しい暑さであります、主さま、あなたの生命の力、あなたの御霊の愛はそれにもまして熱く、力強く私たちを支え担い運んでくださることを感謝いたします。我ら一人ひとりのみならず、我らとつながりをもつ肉親とかい로운な方々に、私たちの祈りを通して、あなたが働き、恵みを頒^わかち与え給うことを信じ、感謝をいたします。

主さま、今ここに臨んでください。今ここに、聖名を呼んでいる一人ひとりの中に身親しく御宿りください。天界にいらっしゃる小池先生と共に、どうぞ、私たちはこの福音のこの勝利の道を、喜びの道を進んで行くことができますように。

また、8月の御殿場東山荘での特別集会にむけて、我々の祈りを深めさせてください。

主イエス・キリストの尊き聖名にあつてこの祈りを御前にお捧げいたします。アーメン。

